

「サン＝シモン、フーリエ文庫」について

農学部教授 坂本 慶一

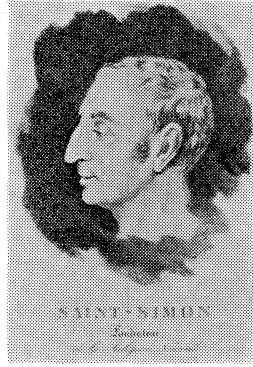
今般、サン＝シモンの著書・パンフレット類・研究書93部(148点)、同じくフーリエに関するもの54部(63点)、計147部(211点)が附属図書館に入り、「サン＝シモン、フーリエ文庫」(S.F.文庫)と名づけられて、すでに整理を完了し、閲覧できる態勢にある。この文庫は、イタリアのフェルトリネツリ研究所長のデル・ポー氏が収集したものを、幸運にも京都大学が入手したものである。

アンリイ・サン＝シモン(1760～1825年)とシャルル・フーリエ(1772～1837年)は、ともに19世紀初頭に活躍したフランスの著名な社会思想家である。しかし一般に、特にわが国では、彼らの思想の独自性によるよりは、むしろマルクスとエンゲルスによって「空想的社会主義者」として批判された思想家として知られている。つまり彼らはあくまでマルクス主義のわき役と見なされてきたにすぎない。しかるに近年、教条主義的マルクス主義への批判の高まり、古典的諸理論によっては説明しきれない複雑・多彩な経済社会の動きなどがきっかけとなって、これまでないがしろにされてきた思想家に対する再評価の気運が生まれてきた。欧米諸国(フランス、ドイツ、イギリス、オランダ、ベルギー、イタリア、アメリカ、ソ連など)における「サン＝シモン復興」および「フーリエ復興」のきざしは、そうした世界的動向を反映するものである。事実、サン＝シモン(サン＝シモン派を含む)とフーリエに関する最近の研究には目覚ましいものがある。それらはいずれも、「空想的社会主義者」という固定観念によって一刀両断されてきた2人の巨大な頭脳の歴史的・現代的役割と意義を発揮し、再評価することを目指している。

若干、研究動向に立ち入ることになるが、サン＝シモンとフーリエの歴史的、現代的意義を問う場合、ごく大まかにいって、次のような研究課題が提起されてきたし、また提起されるであろう。

(1) サン＝シモンとフーリエは、マルクスの思想形成に対していかなる役割を果たしたかという、いわゆるマルクス主義の源泉に関する問題。また、マルクス主義に吸収されつくされていないサン＝シモンとフーリエの思想的独自性は何かという問題。これは非マルクス主義的社会主義の理論的基礎とその実現の可能性にかかわる問題を含んでいる。さらに、マルクス主義とのかかわりにおいて、そもそも科学にとってユートピアとは何か、両者は相互にどのように関係し合うかという、社会科学の方法論に関連する問題も重要である。

(2) サン＝シモンについては、この思想がコントの社会学、チェリーの実証史学の成立にいかなる役割を果たしたか、また19世紀のヨーロッパ諸国における社会思想や社会運動、特に社会的キリスト教、婦人解放運動、企業者の産業活動、生産者組合運動、芸術上の諸運動などに、どのような影響を与えたかということが問題となる。とりわけサン＝シモンが明確



サン＝シモンの肖像

(Allemagne, Henry Renéd :
Les Saint-Simoniens 1827-1837.
Paris, Gründ, 1930 より転載)

に予見した「産業社会」の特質と「産業者」の役割、ならびにそれらの未来的展望については、現代的観点から興味深い問題が提起される。

(3) フーリエについては、19世紀中ば以降の協同組合運動、労働運動、婦人解放運動、コミュニティ創設運動などに与えた直接的影響のほか、次のような諸問題がクローズアップされてくる。宇宙論的スケールで展開されている独自の歴史観、フロイトに先立つ人間情念の心理学的分析、現代文明の産物としての人間疎外の実証的描写、農業技術論・食生活論・農業労働論をふまえた自主管理的農業コミュニケーション論、さらに労働と遊びの統合の理論や教育論・社会医学論・社会資本論の展開など、フーリエの提起する問題は目まがいするほど多彩であり、着想の奇抜さは人の意表をつく。それらはいずれも現代社会の考察にあたって、なお新鮮で有効なヴィジョンを提供する。

ともあれ、「サン＝シモン、フーリエ文庫」は、今日では入手困難な多くの初版本によって構成されている貴重なコレクションである。この文庫が今後、京大関係者のみならず、広くわが国の各層の研究者の研究意欲を大いに刺激するであろうことは間違いない。フランス社会思想に関する系統的コレクションとしては、京大でも最初のものである本文庫が、さらに今後において、小樽商大の「手塚文庫」に匹敵する一大文庫として発展することを期待したい。なお、今年がフーリエ生誕200年に当たることを付記しておきたい。

———— ニュー ス

教養部図書館の建設はじまる

早くから宿願となっていた教養部図書館の建設が決定され、さる8月10日に地鎮祭が行なわれた。現在の教養部図書室は、三高時代からの古い木造建築であることと、約5,000名の学生数に対して約200席の閲覧室という小さなもので、十分なサービス体制もとれず新館の建築が望まれていた。新館は、地上2階地下1階、総面積4,320m²の大きなもので、席数も現在より2.5倍の約500席となるほか、視聴覚室、新聞閲覧室なども設けられ、47年度末に完成の予定である。附属図書館、医学図書館について第3番目の独立の図書館となるが、こんごの活動が大いに期待される。

———— 大学図書館界のうごき

京都図書館協会大学部会の事業計画決まる

京都図書館協会は47年度より、一時その活動を凍結することになったが、大学図書館部会は、研究集会を中心にして、活動を続けることにし、本館がそのお世話を引受けることになった。9月12日の委員会で、次の通り、本年度の研究集会の予定が決定した。多くの方の参加を期待したい。

(1) 書誌学研究集会

期 日	報 告 者	テ ー マ	会 場
10月7日(土)	高橋正隆氏	日本金石文について	大谷大図
11月25日(土)	伊藤祐昭氏	奈良絵本について	京大図
2月17日(土)	河本昭氏	図入本と考古図録類について	京都芸大図

(2) 図書館学研究集会

12月9日(土)	金井孝氏	雑誌の整理運用について	京大図
1月20日(土)	小国健一氏	漢籍目録について	京大図

時間はいずれも土曜午後1時半からです。